

文学の移動／移動の文学

報告 久野量一

第一回 二〇一六年一月二七日（水）

報告者

久野量一「ポストソ連時代のキューバ文学——アナ・リディ

ア・ベガ・セローバほか」

和田忠彦「イタロ・カルヴィーノ——旅する作家、旅する書物」

沼野恭子「リュドミラ・ペトルシェフスカヤ——異次元への

移動」

第二回 二〇一六年七月六日（水）

報告者

野平宗弘「漢詩集『北行雑録』写本から推測する阮攸（グエン・ズー）の北使燕行（一八一三—一八一四年） 経路」

丹羽京子「根無し草として生きる——シヨイヨド・ワリウツ

ラーと『赤いシャール』」

二〇一五年十一月のある水曜日、会議の間隙を縫って総合文化研究所のメンバーが集まった。新しい研究会の立ち上げについて意見交換を行うためである。今から思えば謀議のようなものだ。将来の競争的資金獲得も睨みつつ、研究所のメンバーの多くが参加できるようなテーマは何だろうか。「世界文学」概

念の浮上以降、地域、語圏、時代を超えた文学研究が求められつつある。何人かが持ち寄ったアイディアをもとに議論を進めた。人の移動と創作、そこに否応なしに働く力学、また、文学そのものの移動でもある翻訳（行為）などが概ね共有する問題群だった。こうして最終的に、研究会の名称を「文学の移動／移動の文学」とすることで話はまとまった。

その後、やはり会議のない水曜日を狙って第一回の研究会が企画された。一月の終わりだった。そして年度が改まり、二度目の研究会が催された。報告者とタイトルは先に掲げたとおりである。合計五名の発表で、地域はヨーロッパ、ロシア、アジア、ラテンアメリカの文学が、時代も十八世紀から二十一世紀までが取り上げられた。発表の中身については、この「総合文化研究」のどこか、あるいは別の雑誌などに掲載されているはずなので、そちらを参照していただきたい。

筆者はラテンアメリカの文学が専門だが、その成り立ちからして、欧米文学と同じ程度にアジアやアフリカの文学とつながりがある。地域研究的な側面も強い。と言いながらも、アジアやアフリカ地域の研究者と意見をフラットに交わす機会はなかなかない。なので、こういう研究会が発足したことは嬉しい。発表を聞いていると、自分ももしラテンアメリカではなく、

他の語圏の文学を読んでいたらどんな風になったのだろうか
と想像が膨らんでくる。自分はなぜラテンアメリカ文学に惹か
れたのだろうか、ラテンアメリカの文学を読まない自分は今の自
分とどのくらい違つてどのくらい同じなのだろうか？ そんな
楽しみを与えてくれる三回目の研究会が企画できなかつたの
は残念だ。ぜひ来年度以降も続けたいと思つている。